

[研究ノート]

## 与那国馬の起源

～与那国島に馬がもたらされた時期および経路について～

田 島 和歌子

日本固有の家畜である在来馬は、近代以降の馬匹改良政策によってほぼ絶滅したが、しかし僻地や島しょ部にわずかに残されたものが登録され、各地で保存活動が行われている。公益社団法人日本馬事協会が登録した在来馬には、現在、北海道和種馬（北海道）、木曾馬（長野県木曾地方）、野間馬（愛媛県今治地方）、対州馬（長崎県対馬）、御崎馬（宮崎県都井岬）、トカラ馬（鹿児島県トカラ列島）、宮古馬（沖縄県宮古島）、与那国馬（沖縄県与那国島）の8種がある。

これら在来馬の起源については、その祖先は一つであり、古墳時代に朝鮮半島を経由してヤマトに伝わってきた蒙古馬系の馬が全国に広まったとする説が一般的となっている<sup>1)</sup>。

一方で、与那国島に残された与那国馬については、地理的に他から隔絶され、東南アジアに近接していることなどから、他の在来馬とは別ルート、フィリピンなど南方からもたらされたのではないかとする説も根強く残っている<sup>2)</sup>。

本稿では、与那国馬の起源に関連する先行研究および史料をまとめ、馬がいつごろ、どこから与那国島に渡来したのかという点につ

いて検討した。

与那国島は、台湾の東110km地点に位置する国境の島である。現在の行政区分は沖縄県八重山郡与那国町で、平均気温23.8℃、年間降水量約2350mmと、亜熱帯雨林気候に属する。面積は28.88平方kmで、島にはいくつかの低山があり、水に恵まれている。古くより稲作が行われ、15世紀までは、他地域の支配や影響を受けない自給自足の独立した生活圏を形成していた。16世紀以降、沖縄本島を中心とする琉球王国、ひいては薩摩藩の版図に組み込まれ、260年余にわたり搾取されてきた歴史がある。現在はさとうきび栽培やカジキ漁といった一次産業、また観光業がみられる。ピーク時の1950年前後には6000を超えた人口が、現在およそ1600人で年々減少の一途を辿り、経済の自立と活性化という課題を抱えている。

与那国島は15世紀末、李氏朝鮮の歴史書である成宗大王実録105巻の中において初めて史料に登場した。1477年、遭難して与那国島に漂着した済州島民3名が、半年間島民と暮らした際の与那国島の状況が、聞き取りの形で残されている。それによるとこの時期、島には牛、鶏、猫がいたとされるが、馬

に関する記述はない。稲作に踏耕（牛に踏ませて稲を育てる）を行っていたという<sup>3)</sup>。信憑性ありとされているこの記録が正しければ、与那国島に馬が渡来したのは、これより後、すなわち16世紀以降ということになる。

本稿ではこの史実に基づき、まず1.において、16世紀以降の与那国島を扱った先行研究や史料のなかから、馬にかかわる記述を集めて整理した。次に2.において、馬が与那国島に渡来したであろうと推定される16世紀から18世紀の歴史的状況と暮らしについてまとめた。さらに3.においては、琉球における馬利用の状況と与那国島の他地域との交流について述べた。最後に4.において、調査結果をもとに与那国馬の起源について考察した。

## 1. 史料のなかの与那国馬

16世紀以降の与那国島を扱った先行研究や史料をみると、与那国島において馬の存在が確認できるのは19世紀以降のことである。そこで、ここでは先行研究および史料の中から19世紀の与那国馬に関する記述をいくつか拾い出した。例えば得能は、19世紀の八重山行政文書の集成である万書付集（下）を引用し「咸豊七年（一八五七）には与那国の困窮者に牛馬を分け与えた人物がいた。」と紹介しており<sup>4)</sup>、この時期に馬が牛とともに使役動物として用いられていた様子が分かる。また同様に、得能は19世紀の八重山の統計資料である御問合控を引用し「唐竹は帆の棧などに利用され、数十年にわたって栽培してきたが、同治八年（一八六九）には御用

になるように育ておらず、施肥や草刈りが不行届であった。在番や頭たちは、根を取って、「牛馬骨」などを入れて、しっかり手入れするよう命じている。」と紹介しており<sup>5)</sup>、馬の骨が、牛の骨とともに肥料として用いられていたことが分かる。また、1854年には、与那国村で田原（たばる）にある二つの橋が壊れて人馬が通れなくなったとの記録があり<sup>6)</sup>、当時、人々がこのふたつの橋を越えて、馬を引き田畑や他集落へ往来していた様子が伺える。さらに、19世紀半ばには、「与那国島の借穀は二倍の利息を付けるため、すぐに利息がかさみ、家屋敷・牛馬・田地などを取られ、困窮に至る者もあるといい、あつてはならないことである。今後は法定の利息で貸借すること」との記録があり<sup>7)</sup>、この当時、人々が馬を所有していたこと、借金の返済に使役馬を取られることがあったこと、また、それを王府が禁じていることがわかる。同じく、19世紀の行政文書によれば、与那国島の百姓に課されていた役職の一つに、「馬ふさ（馬補佐）」というものがあつた<sup>8)</sup>。この役は、朝早く「はるまい（原廻り）」に出て、逃げた牛や馬が作物を荒らしているのを見つけると、持ち主に通知して、その損料を賠償させるというものであつた。さらに得能は、1845年調査のために島に着船したイギリス船サマラン号の船長による、「調査用の馬を提供され、…牛馬や山羊は牧草に恵まれて豊富だった」との記録を紹介しており<sup>9)</sup>、この時期、島には馬が放牧され、また乗馬用に馴らされた個体のいた様子がわかる。また、海防に力を入れていた琉球王府は、島々の高台に遠見番小屋を設けて、船の往来を監視させていた。与那国島にも、島の

東側にある丘陵に遠見番小屋が設けられ、船が現れると3人詰めていた番人のうちの一人が、早馬で村番所まで報告に行ったとい<sup>10)</sup>、馬が公的な役務に用いられていたことが分かる。ちなみに、明治以降の統計資料には、与那国島の馬の頭数が記録されている。それによれば、1892年（明治25年）に島には417頭いたと言うことである<sup>11)</sup>。

このように与那国馬は19世紀の史料にたびたび登場しており、この時期になると、人々が馬を所有し、牛とともに牧場に放牧し、馴らし、移手段や駄載、公的な役務のための乗馬に用いていたことが分かった。一方で、16世紀から18世紀の史料からは与那国馬の存在を確認することはできなかった。

## 2. 16世紀から18世紀の与那国島における歴史的状況と暮らし

馬は19世紀には様々に利用されており、18世紀までには島に渡来していただろうということが推定される。ここでは、馬が島に渡来したであろう時期、すなわち、16世紀から18世紀のあいだの与那国島をめぐる歴史的な状況とその暮らしぶりについて整理したい。

### 2.1 歴史的状況

まず16世紀は、与那国島がそれまで連続と続いてきた独立の生活圏であった時代に終わりを告げ、沖縄本島の首里・那覇を中心とする琉球王府の支配に組み込まれた時代であった。その直前、15世紀末、済州島民が漂着した際には、自給自足の独立した状態であったが<sup>12)</sup>、1510年に琉球中山王が西表島

の祖納堂を与那国与人に任命したことをもって、与那国島は、正式に琉球の支配下に組み込まれたのである。

17世紀になると、琉球王国自体が島津の侵攻に屈し、薩摩藩を介して幕藩体制に組み込まれることとなった。王府は薩摩藩に支払わなければならない貢納の税源確保のため、1637年、宮古・八重山地方に人头税と呼ばれる税制を課した。この重税は近代初期まで約260年間にわたって続いた。さらに、王府はそれまで地元の人間に任せていた地方行政を、首里から派遣役人を駐在させて、お目付け役として監督にあたらせるようになった。たとえば八重山では17世紀前半、首里からの「八重山島在番」が駐在するようになり、八重山の地元役人である「蔵元」の行政を監督するようになった。また、17世紀後半には「蔵元」の周りに点在していた島々・村々の地元役人の上にも、「蔵元」から詰役人を派遣して、監督にあたらせるようになった。18世紀始めに、与那国島には八重山の「蔵元」から計3名の詰役人が派遣され駐在していたという。詰役人の制度はその後18世紀を通して続いた<sup>13)</sup>。

以上のとおり、与那国島は16世紀に王府の支配下に組み込まれ、17世紀前半には税負担が課され、17世紀後半になると、地方行政制度の変更によって島外からの詰役人が島に駐在することになったという変遷を経て来た訳である。

### 2.2 暮らし

16・17世紀、島では依然として牛の踏耕による稲作農業が行われ、畑作はほとんどなかった。17世紀半ばまで、蔵元から派遣さ

れる詰役人も駐在せず、人口も124人（1651年）と少なかったところをみると、王府への納税義務による経済的圧迫を除いては、島での農業のあり方や社会構成、暮らしぶりに主要な変化があったとは考えにくい<sup>14)</sup>。

18世紀に入ると、人口は1737年に477人、1771年に972人と増加している。相次ぐ飢饉で島の疲弊が進む一方、18世紀の後半には島民のあいだに格差が生じ、「富戸」の出現がみられる。農業の仕方については、18世紀半ばの報告によると、毎年ぎりぎりの生活をしてきたが、耕作人を5人1組にして、そのリーダーに監督させるようにしたところ、収量が上がったという。また、18世紀後半に近隣の島々で津波や疫病によって家畜の牛が死に絶えるという事態が発生した際に、与那国島から石垣島へ、数度にわたって牛が運び出されている。たとえば、1764年には80頭余りの牛が運ばれており、この当時、家畜を帆船に載せ、島々を移動していた様子が伺える<sup>15)</sup>。

このように、16・17世紀の暮らしぶりは、15世紀までのそれと大きく変わっていない。18世紀以降は人口が増加し、農業の仕方が改められるなどの改革が見られる。また島全体の疲弊にもかかわらず、島民のあいだに「富戸」が存在するようになっており、暮らしぶりに変化が見られる。また、他の島々とのあいだで家畜のやり取りが行われていた事実は注目に値する。

### 3. 琉球における馬利用、および与那国島と他地域との交流

前章では、馬が与那国島に渡来した可能性

のある時期、すなわち16世紀から18世紀の島をめぐる歴史的状況と暮らしについてまとめた。与那国馬の起源を検討するためには、島での状況のみならず、琉球全体において馬利用の状況を調べ、また、与那国島と島外との交流についても検討する必要があると思われるので、ここではこの2点を整理した。

#### 3.1 琉球における馬利用

そもそも沖縄へ馬がもたらされたのは、11世紀、九州からとされている<sup>16)</sup>。12世紀から15世紀になると養馬が普及し、琉球は、1374年に始まった明との朝貢貿易で多くの馬を輸出している。1382年に明が983頭の馬を買い付けたという記録からも、14世紀末には相当数の馬産が行なわれていた<sup>17)</sup>。また琉球では16世紀、明との冊封儀礼の前後に3～500人の女性祭司が、乗馬や徒歩で王宮に入って遊びをするという大規模な行事が行われていたとの記録があり<sup>18)</sup>、馬が女性祭司の乗る神聖な動物であったことが伺える。

一方、沖縄本島から宮古島に馬が持ち込まれたのは14世紀頃と言われている<sup>19)</sup>。石垣島でも15世紀末から16世紀始めに「牛馬3～4百頭も飼い、威勢を振る」う人物がいたとの記録があり<sup>20)</sup>、この時期には石垣島にも馬が伝わっていたことが分かる。さらに17世紀以降になると、宮古・石垣は馬産地として発展し、馬場が作られ、王府や薩摩藩、ひいては江戸へ献上するための馬を選定する競馬が行われていた<sup>21)</sup>。現在確認されている馬場跡は、沖縄本島153、本島周辺離島19、先島6（宮古3、石垣3）となっている<sup>22)</sup>。また宮古群島では、1771年に起きた明和の大津波により403頭の馬が失われたとの記録があ

り、18世紀末には相当数の馬がいたようである<sup>23)</sup>。

以上、琉球への馬の渡来は11世紀で、早くから馬産が行われ、馬は支配者の家畜として、また交易品として重要な位置を占めていた。宮古島に沖縄本島から馬が伝えられたのは14世紀以降で、15世紀末には石垣島にも馬がいたと推察される。17世紀になると宮古・石垣両地域では王府の馬産地として多数の馬が飼養され、競馬などの馬事文化も継承されていた。

### 3.2 与那国島と他地域との交流

16世紀から18世紀のあいだ、与那国島と島外にはどのような交流があったのであろうか。16世紀に琉球の支配下に入った与那国島は、17世紀になると人頭税を課され、上納物を積んだ船や役人を乗せた船が往来するようになった。

確かに、陸続きの場所や、島と島との距離が近い地域に比べると、当時、与那国が相対的にみて孤立した状況にあったことは確かであろう。航海技術に乏しかった事も鑑み、王府からみても、宮古島・八重山島が「遠海」とされ、宮古の多良間島と八重山の与那国島は、さらなる「遠海」と認識されていたようである<sup>25)</sup>。しかし、15世紀以前の自給自足の時代に比べると、16世紀以降に琉球に組み込まれてからは、王府や石垣との関係は年々密になっていった。

与那国島には、琉球・八重山の船だけでなく、中国、台湾、朝鮮、香港をはじめとする外国船が漂着することもままあったようだ。たとえば、1660年に阿蘭陀船が漂着・破損、1719年にはヤマトの紀伊国の人々が漂着、

19世紀には中国、朝鮮、台湾などが遭難して島に漂着している<sup>26)</sup>。また1.において紹介したイギリス船サマラン号が調査のため島を訪れたのも1845年のことであった。台湾とのあいだには、古くから海上の物々交換など交流が行われていた<sup>27)</sup>。

以上、この時期の与那国島では、琉球支配地域、およびそれ以外の地域との交流の双方が確認できる。歴史的状況に照らすと、琉球支配地域との交流が主であり、頻度も高かったと考えるのが妥当であろう。

## 4. 与那国馬の起源再考

これまでにみてきたとおり、馬は、16世紀から18世紀のあいだに与那国島に渡来したと考えられる。では、どこから与那国島に渡来したのであろうか。

確かに、与那国島は地理的に他の沖縄の島々から離れており、台湾からはわずか110kmと近い。またフィリピンからもわずか480kmで、これは那覇からの650kmよりも近いのである。さらに、1.で見たように、近世における馬利用は、補助的な畜力（主な畜力は牛）として、また一部で公的役務のために利用するという限定的なものであった。宮古や石垣のように王府の馬産地となったり、“支配者の家畜”として競馬など琉球伝来の馬文化が継承されてはいなかったのである。であるならば、与那国馬が他の在来馬とは別の起源を持ち、例えば、地理的に近いフィリピンなどから移入されたとも考えられる。

たとえば、米城は与那国馬の渡来ルートに

に関して、第二次世界大戦中、与那国島を訪れた西表船浮要塞砲兵連隊の第二中隊長鉄田義司による日記を引いて、島民や島で鑿節工場を営んでいた発田夫妻との会話から、与那国馬の起源にフィリピンのカミグイン島(Camiguine)の名を示唆している<sup>28)</sup>。

しかし馬が伝来したであろう16世紀から18世紀の島の状況、及び近隣の島々における馬利用状況、島と他地域との関係性を総合すると、石垣島をはじめとする琉球支配圏内からもたらされたと考えるのが妥当なことと思われる。なお、与那国馬が南方から移入された可能性がなかったわけではなく、それを完全に否定するものではない。

最後に、馬場や競馬といった琉球の馬事文化が与那国島に継承されなかった理由については、一つには、馬が渡来した時期が、早くとも16世紀、遅ければ18世紀と新しかったこと、また、島の人口が17世紀半ばに124人、18世紀に1000人以下と少ない上、王府にとっては遠隔で統治しにくい場所にあったことなどが考えられよう。

本稿では、与那国馬の起源に関する先行研究と史料をまとめ、馬がいつごろ、どこから与那国島へ渡来したのかということを検討した。その結果、おそらく琉球王府の影響の下で、16世紀から18世紀ごろに、近隣の島々からもたらされた可能性が高いと推察された。伝来の正確な時期の解明についてはさらなる史料の検討が必要であろう。

与那国馬の保存については、これまで公益社団法人日本馬事協会の助成の下で、保存会などが中心となって、繁殖管理による個体数の維持や種馬の精液採取・保存などの活動を行ってきた。一方で、在来馬はその土地に固

有の文化財としての側面も持ち合わせており、馬にかかわる歴史や人々とのかかわりを記録・保存していくという作業は、今後もより一層求められている。

#### 注

- 1) 戸崎晃明「日本在来馬はどこから来たか?」『Hippophile』53号, 2013年7月, pp.29-35。
- 2) 米城恵「与那国馬 あれこれ」『ホースメイト』47号, 2006年, (社)日本馬事協会, pp.20-24
- 3) 『与那国町史 第2巻 民俗編』2010年, pp.14-22 なお本著には、成宗大王実録105巻の与那国島に該当する箇所の読み下し全文が掲載されている。
- 4) 得能壽美「近世与那国の民衆生活史」『与那国町史 第3巻 歴史編』2013a年, p.217
- 5) 得能, 同上, p.218
- 6) 『球陽』1970節 なお、本史料は1743年から1745年に編纂された琉球王国の正史で、1876年まで追記された。online「球陽全文検索」<[http://tutenze.pluto.ryucom.jp/public\\_html/msearch151/kyuyouzenbun/mamas.cgi](http://tutenze.pluto.ryucom.jp/public_html/msearch151/kyuyouzenbun/mamas.cgi)>, 参照2015-1-3
- 7) 『翁長親方八重山島規模帳』415節 1994年, 石垣市総務部市史編集室 なお、本史料は1858年、王府派遣の行政監察官によって記された行政文書で八重山の実情を伝えている。
- 8) 『富川親方八重山諸村公事帳』33節 2004年, 石垣市総務部市史編集課なお、本史料は、1875年、王府派遣の行政監察官によって記された行政文書で八重山の実情を伝えている。
- 9) 得能壽美「与那国島をめぐる漂流・漂着」『与那国町史 第3巻 歴史編』2013b年, p.261
- 10) 池間栄三『与那国の歴史』1959年, p.155
- 11) 『沖縄県八重山島統計一覽略表: 沖縄県八重山島役所調査』1894年, online「近代デジタルライブラリー」<<http://kindai.ndl.go.jp/>>, 参照2015-1-3
- 12) 3に同じ。
- 13) 高良倉吉「首里王府・蔵元と与那国島」『与那国町史 第3巻 歴史編』2013年, pp.184-195
- 14) 得能, 前掲論文, 2013a, pp.215-217
- 15) 得能, 前掲論文, 2013a, pp.215, 217-218, 220-223

- 16) 新城明久『沖縄の在来家畜 その伝来と生活史』2010年, ボーダーインク, p.36
- 17) 鈴木純夫『『日本在来馬』歴史研究会』  
<<http://blogs.yahoo.co.jp/nihonzairaiiba08/folder/40206.html?m=lc&p=12>>  
参照2015-1-3
- 18) 高梨一美「古琉球の女性祭司の活動 16世紀を中心に」2001年, 慶応義塾大学地域研シンポジウム
- 19) 『宮古毎日新聞』『『宮古馬』でトークセッション/みゃーく市民文化講座』2014年11月4日付
- 20) 『慶来慶田城由来記』1775年頃, 石垣市史叢書 1 石垣市役所総務部市史編集室
- 21) 『宮古毎日新聞』「長濱幸男さん(66歳)／宮古島市史編さん委員 在来馬のルーツさがしに」2013年4月27日付
- 22) 梅崎晴光「美ら島競馬」2011年, 2. 那覇online「美ら島物語」  
<<http://www.churashima.net/keiba/02/>>  
参照2015-1-3
- 23) 梅崎, 同上, 5. 石垣・宮古
- 25) 得能, 前掲論文, 2013 a, p.214
- 26) 得能, 前掲論文, 2013 b, pp.260-262
- 27) 安溪貴子・盛口満羅『うたいつぐ記憶 与那国・石垣島のくらし』2011年, ボーダーインク, p.72
- 28) 2に同じ

#### Abstract

This study examines the origins of Yonaguni horse, which is one of the rare horse breeds native to Japan, based on some previous work and historical sources. First, the author estimated the introduction of those horses to the island to be between 16th to 18th centuries and then, looked at the historical background and the way of life on the island at that time. The author also assesses the use of horses throughout the Ryukyu Kingdom and the interaction of the island with other areas of the Kingdom. Based on these considerations, the author concludes that Yonaguni horse likely originates from nearby islands within the Ryukyu Kingdom.